昭和文学全集

6

室生犀星
堀辰雄
中野重治
佐多稲子

小学館

昭和文学全集

6

室生犀星

堀辰雄

横光利一

岡本かの子

小学館

昭和文学全集
第6巻

昭和六三年六月一日　初版第一刷発行

著者——室生犀星　堀辰雄　中野重治　佐多稲子

発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
〒一〇一—〇〇一 東京都千代田区一ッ橋二丁目三番一号
振替 東京八—二〇〇番
電話 編集・〇三—二二九二—四三五一
業務・〇三—二二三〇—五三二二
販売・〇三—二二三〇—五七三九

印刷——凸版印刷株式会社
製本——凸版印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568006-7
© MUROU ASAKO HORI TAE
ENOME UME SATA INEKO 1988

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

室生犀星 5

7 あにいもうと
18 つくしこいしの歌
36 虫寺抄
59 かげろうの日記遺文
136 蜜のあわれ
192 われはうたえどやぶれかぶれ
我が愛する詩人の伝記より
221 北原白秋
229 高村光太郎
236 萩原朔太郎
243 釈迢空
251 堀辰雄
258 立原道造

堀辰雄 267

269 ルウベンスの偽画
278 聖家族
290 風立ちぬ
329 かげろうの日記
350 ほととぎす
371 姨捨
379 晩夏
389 菜穂子
450 曠野

458 大和路・信濃路
498 雪の上の足跡

中野重治 503

505 村の家
521 歌のわかれ
569 五勺の酒
585 むらぎも
742 「郷土望景詩」に現われた憤怒
748 芸術に政治的価値なんてものはない
758 「文学者に就て」について
765 批評の人間性
785 中野重治詩集

佐多稲子 817

819 キャラメル工場から
826 私の東京地図
917 灰色の午後
995 水
999 幸福
1006 時に佇つ

1069 作家アルバム

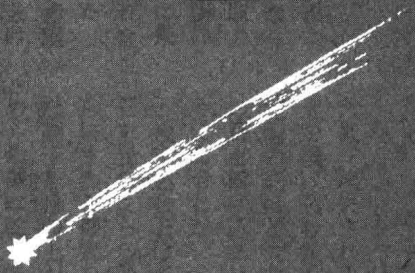
解説

1077 室生犀星……室生朝子
1084 堀辰雄……清水徹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1092　中野重治……鶴見俊輔
1099　佐多稲子……小林裕子
年譜
1106　室生犀星……本多浩
1112　堀辰雄……谷田昌平
1117　中野重治……松下裕
1122　佐多稲子……佐多稲子研究会
1128　底本について
1129　用字用語について

室生犀星



あにいもうと

赤座は年中裸で磧で暮らした。

人夫頭である関係から冬でも川場に出張っていて、小屋掛けの中で秩父の山が見えなくなるまで仕事をした。まん中に石でへり取った炉をこしらえ、焚火で、寒の内は旨い鮒の味噌汁をつくった。春になると、からだに朱の線をひいた石斑魚をひと網打って、それを蛇籠の残り竹の串に刺してじいじい炙った。お腹は子を持って撥ちきれそうな奴を、赤座は骨ごと舐っていた。人夫たちは滅多に分けて貰えなかったが、そんなに食いたかったらてめえだちも一網打ったらどうだと、投網をあごで掬って見せるきりだった。

赤座は蛇籠でせぎをつくるのに、蛇籠に詰める石の見張りが利いていて、赤座の蛇籠といえば雪解時の脚の迅い出水や、つゆ時の腰の強い増水が毎日続いて川底をさらっても、大抵、流失されることがなかった。石積舟の上で投げ込む蛇籠の石を見張りしている彼は蛇籠の底ほど大きい石で固め、あいだに小型の石を投げ込ませ、隙間もなくたたみ込むように命令した。

投げ込む石はちから一杯にやれ、石よりも石を畳むこちらの気合だと思え、ヘタ張るならいまから襯衣を干してかえれ、赤座はこんな調子を舟の上からどなりちらしていた。てめえの褌は乾いているではねえか、そんな褌の乾いている渡世をした覚えはないおれだから、そんな奴はおれの手では使えない、赤座はそんなふうで人夫たちの怠気を見せる奴をどんどん解雇した。朝日が磧の石をまだ白くしない前に、いつもその日の人夫だちの出足を検べ八時が五分遅れていても、

――なあ、おれにもお法度があるというものじゃないか。

そういうと仕事の割宛をしないで、その日はそんな人夫を使おうとしなかった。道具をかついで人夫は磧から土手へ、土手からいま出て来たばかりの家へもどらねばならなかった。そんな奴をふりかえりもしないで、七杯の舟に石積みの手分けをし、蛇籠止の棒杭を打つものを裸で水の中へ追い込み磧では蛇籠を編む仕事をひと廻り査べると舟を淵の上にとめて水深に割宛てられる蛇籠の数をよんでいたりした。そういう赤座の持舟のなかに長い竹の柄のついたヤスが一本用意されてあって、新鱒が泳ぎ澄んでいて、水とおなじ色をしているのを目にいれると、そのヤスの柄が水深一杯にしずみ込んでゆき、さらに五寸ばかり突然にぐいと突きこまれたなと見ると、嘘つきのような口をあけたぎちぎちした鱒のあたまの深緑色が、美ごとな三本の逆さ鉾の形をしたヤスの尖をゆすぶりながら刺されていた。その尾のさきで腕ッ腹を叩かれたらしびれて了うといわれた川鱒も、赤座の拳でがんと一つ張られると、鱒は女の足のようにべっとりと動かなくなるのであった。

人夫だちは川底の仕事ですら胡魔化しが利かずに、赤座の眼ンの中で水をくぐり呼吸を吐きに浮び、また水の中にもぐって行った。若葉の季節は水の底もそのように新しい若鮎

やはぜや、石まで蒼む快いしゅんであったから、赤座はかんしゃくを起すと自分も飛び込んで行って、人夫のからだを小づいたり頭を一つひっぱたいたりして瀬すじを絶つ工事に一番かんじんな底畳みに大きな石を沈ませるのであった。水の中ですら赤座の嗄声が歇まずにどなり散らされた。どんな速い底水のある淵でも赤座はひらめのようにからだを薄くして沈んで行き、水中の息の永い事は人夫達も及ばなかった。人夫たちは水の中で怒った形相をこわがったが、水の中からあがると何時も機嫌がよかった。川のぬしであるよりも、自分でつくった池くらいにしか、川の事を考えていなかった。

小屋掛けに月に二度の銭勘定の日には、赤座の妻のりきがたずねて来たが、これはみんなから嬶仏といわれるほど、ゆったりと物わかりのよい柔和な女だった。りきはいつも赤座をあんな人だからあんな人と思うてつき合って下され、いくらそとから言ったってだめだから聞きたくないことは聞かなくともよいからと、てんで赤座をあたまごなしに説きふせているが、赤座はりきにかまいつけないで、ふんとか、うんとか、それだけ言葉みじかに返辞をするだけだった。銭勘定は磧仕事には稀らしいくらいきれいに支払われ、咎な端たを削ることなぞしなかった。りきが請負の後払いを先に廻すことに人気を得て、勘定日にせんべいやお芋の包みを持って土手のうえに姿をあらわすと人夫たちはみんな手を振って迎えた。お茶の三時にはりきを取りかこんで荒男たちが元気にべちゃくちゃしゃべり、りきの手から貰う金を着物に入れたり手拭につつんだりして、磧が一杯に声をそろえて、賑うてくるのであった。赤座はりきから報告をきくだけで金のことは永い間の習慣で、委せきりであった。赤座は仕事だけをしに来ているようで、用事のない三時にも磧と磧を二分している流れとを、見つめているにすぎなかった。日光の中で仕事をしつづけている人間は、眼の中にまで日焼けがしているごとく赤座の眼もそのようであった。そのような眼はただ川仕事をするだけに生れついているようであり、雨つづきの出水の日にもわざわざ出場まで行って、濁ってぶつぶつ泥を煮ている川水を眺めていた。そんな時に濁った赤座の眼は悲しそうにしぼんで、濁流のなかに注ぎ込まれているようであった。繋いである舟は岸とすれすれに波に押し上げられ、小屋はきれいに流されてしまった泥波の立った磧は、赤座なんぞのちからや命令がどんなに仲間のあいだにはばが利いても、出水の勢いには叶わなかった。七つの時から磧で育ち、十五で一人前の石追いができ、蛇籠の竹のささくれで足を血だらけにして育った赤座は、出水の泥濁りを見るたびにおそろしいもんだなあと思うが、どうしてそんな出水が恐ろしい百数十本のせぎの蛇籠を押し流してしまうかが分らなかった。二十ころから一本立になっても蛇籠のこしらえは一年ともたないで流されてしまうが、やっと川底の分だけはいつも残っていてそれだけでも仲間では「赤座の蛇籠」としてほめられていた。

赤座はりきが勘定をすましてかえろうとすると、

——もんちは帰って来たか。

と、感情をあらわさないで、なんでもないことをそういうように聞いた。

——かえってこないんです。

——伊之助は仕事に出たか。

——あれきりふて寝しているの。

——もう用はないよ。

赤座はそうりきにいうと、持場についた人夫だちのほうに向いて歩き出した。肥った赤座は肥った人がどっしりと歩くくせがあるように、磧の上に逞しいからだを搬んで行った。

赤座には三人の子供があった。子供は子供であるが、長男の伊之は二十八になり石屋に年季を入れ一人前になっていたが、怠者のうえに何処でどう関係をつけるか、しょっちゅ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

う女のことで紛糾が絶えなかった。渡りの利く石職工でも伊之は墓碑の文刻に腕が冴えていたから、克明にさえ働けば金になったが、一週間か十日間も働きつめるとその金を持ったきり、二三日は帰って来なかった。妹のもんの言いぐさではないが浅草あたりの電車や自動車がごうと鳴って聞えるのでしょうと言っていた。三日も経ってかえると又仕事を始めその金が手にはいると、またすぐ出掛けて了うのであった。りきの叱言なぞてんで耳に入れず、赤座は日が暮れなければ仕事からかえらないので、晩は旨く親父と顔を合すことを避けて外に出ていた。

伊之の下に妹が二人いて姉はもんといい、みんなから愛称をもんちと言われていたが、下谷の檀塔寺に奉公しているうちに学生と出来てしまい、その子供をはらむと、学生は国にかえってしまい文通はなかった。ぐれ出したもんは奉公先で次から次と男ができ、こんどは小料理や酒場をそれからそれと渡り歩いて半年も帰って来なかった。帰って来ると乱次なく寝そべって何かだるそうに喘いでいるような息づかいで、りきをあごで使っていた。りきは口叱言を言いながらも、この子はつまらないことで苦労しているが、いい加減にしないかといい、半分は顔を見るのも厭そうにしながら、半分はきつく憐れがって食べたいものを作ってやり、睡れるだけ睡らして置くのだった。実際、もんは睡足りたということもないほど顔が真青になるまで睡ていた。りきはそんな草臥れがよく解る気持がし、兄の伊之が外泊りでかえってくると、やはり終日打通しでからだに穴の開くほど睡ていた。かれら兄妹は起きると、目をほそめ未だ草臥れのこる懶いからだを片手でささえながら、母親の手まめにうごく姿を珍らしくもなく眺めるだけであった。伊之はこの母親が死んだらこの家には居られないと思うときだけ、りきが働きつめで打倒れでもしなければよいがと、母親の顔をちょっとの間身にしみて見るのであった。だが、そんなことはその間だけですぐ忘れてしまった。

もんはこんなことを言ってそれが一番かんじんなことであるように、

——お金の心配だけはさせないわ。

と、母親にいうのであった。

漸と一年も経って学生であった小畑が赤座の家にたずねて来た時は、もんは五反田の何処かに勤めていたが、例によって所番地は知らないので尋ねようがなかった。その代り月にいちどは帰宅するからというのだ。りき一人でこの問題の解決のしようがなく磧の出場に行って赤座にこの話をした。赤座はだまって小屋から出ると、りきと一しょに土手の上に登り、土手づたいに近い自宅へいそいだが、りきは対手が若い学生のことであるから手荒なことをしないでいてくれるように言った。

——多分、子供の始末をつけに来たんでしょう。まだ、子供が生きているとでも考えているのじゃないか知ら。

——すれた男に見えるか。

——まるで坊ちゃんです。

赤座は小畑と対き合うたが、赤座の体質風貌の威圧で小畑はすぐものがいえない風であった。赤座は端的に用件を手早く言っていただきましょうと言ったきり、むっつりと黙り込んでしまった。小畑は今まで打っちゃっておいて上れた義理ではないが、国の親父に禁足同様にされていて抜け出す隙がなかったのだと言った。こんど上京していろいろの費用を負担させて貰い、それを自分だけの良心のつぐないにしたいと言ったが、肝心のもんと一緒になるとか、もんに逢わせてくれとかいうことを一言もいわなかった。却ってもんがいないのがこの男に都合のよいごたごたを避けさせているように、赤座はすぐ見ぬいて了った。も一つ弱そうな学生あがりに見えるこの青年の実直そうな容子とは反対にこういう男だから一年の間どんな手紙をやっても、返辞一本出さずにいる根気よさと、つッ放しの

腰をすえることができたのだと、蒼白い顔にりこうそうに覚悟をきめてしゃべっている小畑を、こいつ馬鹿でない掛合をもって来たと思った。

——子供は死産でした。もんはあれから、やぶれかぶれです。

赤座はこれだけいうと、驚いて眼をきょとんとさせた小畑につつみ切れない面倒くささから脱けたほっとした気持を感じることができ、赤座にはそれがすぐ分って野郎旨くやりやがったと思い、遠い多摩まで足を搬んだ甲斐があったろうと、そう彼はだぶだぶの腹の中で思った。おもんさんはいま何処にいるのでしょう、よかったら居所を知らしていただけないでしょうか。僕はあやまりたいことも沢山たまっているので、それをあやまってさっぱりした気持になりたいのですと、勢いを得た妙な昂奮した語勢で小畑は言ったが、赤座はこの青二才いい気になっていると、見え透いた彼の安堵した気持が、頭をあおって来た。もんの腹に子供があるとりきから聞いた時のぐらぐらした厭な気持をもてあつかったあの時分の、磧仕事の出場の不機嫌を蹴散らすことができずに、どれだけ小者人夫に拳や頬打ちを食わしたか分らなかった。赤座は狂れているのじゃないかと蔭口を叩かれるほど、そこらに気持をおちつけるところがなかった。

もんは奥の間で寝たきりであった。娘がハッキリと誰かにおもちゃにされ負けて帰って来たと、考えると、負けたことのない赤座はもんの顔を見たくもなかった。道楽者の伊之はああなることは始めから分り切っていることだ、だからおれは家から女を放すことは危ないと言ったのだと、りきを暇さえあればいじめた。りきはいじめられたきりで黙っていたが、伊之が時々汚ない物をひっくり返すようにもんの寝床に立ち上ったまま、大方、にやけ野郎にベタついて、子供時分のよだれをもう一遍垂らしやがったので、臍の上がせり出したのだろう。狗だか椋鳥だかわけの分らないものをへり出す前に、何とか、悧巧にかたをつけたほうがいい、羅紗くさい書生っぽのヒイヒイ泣きやがるガキの卵の夜啼なんぞ聞くのはまッ平だと、頭痛で氷でひやしている枕上でどなるので、りきはわざわざ伊之にあんまり口がすぎるよ、お前の知ったことじゃないから此方に来ていてくれと言っても、近頃外の女との間のうまく行かない伊之は何の腹いせだか、怒鳴ることを止めなかった。親身の兄妹のにくみ合う気持はこんなに突ッ込んで悪たれ口を叩くものかと、母親は惘れてものがいえないくらいだった。伊之は続けさまにその顔つきでいちゃつきやがったかと思うと、おら、へどものだ、しかも対手の野郎はてめえより十倍がたりこうと来ているから、舐ってしまったらあとに用のない女と随徳寺をきめこんだ、全く年中そのつらを見ている奴もたまらないからなあ、名前もいわなければ国のところもいわず野郎は野郎でうんともすうとも言ってこないじゃないか。そんな野郎をかばいやがっていとしがるなんてこん畜生ア、まったく惚れたんだか抜けやがったんだか知らないが方図のないあまッちょさ、腹ん中の餓鬼がどんどんふとりやがって図に乗ってぽんと飛び出した日にゃ、世間じゃ誰あって対手にしてくれるものはなしさ、餓鬼をつれて土手から乗合に乗って東京のまン中へでも行って、どこかに蛙のようにつぶれてしまうかしなければおさまる代ものじゃないと、自分で調子づいて毒舌の小歇みもなかった。りきが止めると又カッとなってお母あもお母あじゃないか、こんなしたたか者を生みつけておいていまさらおれの口をふさごうなんて、女らしくもないことさ、妹のさんのことをおもうとおらさんが可哀そうなくらいさ、——伊之は末の妹のさんが気まじめに奉公先にいて時々履物なぞみやげに持ってかえることを、ほめていうのであった。さんの話が出るとみんな黙ってさんのことを考えていた。あんな温和しい子供もいるのに、伊之

よ、お前のように仕事もしないで朝から父さんの米さ食べてがんがん言っている人もいるんだ、怒っていいときとわるい時とがある、いまは、もんをとっつかまえて怒るときではないのだもの、怒ってよかったら父ッさんに怒ってもらえばいいのだ、父さんはだまっていなさるのだもの、皆もだまってもんをしずかにしてやらんならんじゃないかとりきは持前の声のやさしい割に人の頭にくい込むような言葉づかいでたしなめるのであった。もんはもんで寝床のなかで頭痛で顔をしかめながら、兄さんだってあひると同じで生み放しにしておいて母さんにあと口を何時もふいて貰ってばかりいるじゃないか。裏の戸口まで女を引きずり込んでいてとうとう父さんに見つかったのを、あたしがふらりと出てやってさ、そとの女の姿を匿ってあげたときあ、暗いところで手を合せてお礼をいったくせに、こんな弱っているあたしを犬の仔かなにかのように暇さえあれば汚ないもの扱いも大概にして頂戴、兄さんにたべさしてもらっているんじゃあるまいし、何かのくせにぶりぶりして突っかかったりして、あんまりひどいわ。お腹の方のかたがついたらあたしゃ費用はどんなことをしたって償うつもりです。それを機会にもういっさい母さん父さんに心配はかけないわ。だから、わたしのからだに傷がついたのをきっかけに、あたしのからだをあたしが貰い切ってどんなにしようが誰からも何にもいわれないつもりよ、父さんだって言ってたわよ、お前はお前でかたをつけろ、そんな娘のつらあ見るのも厭だと言っていたわ。だから兄さんからそんな兄さんづらをされたって頭痛がするばかりで何にもこたえないわ。外の女の首尾が悪いからってそんな胆ッ玉のちいさいことで喚き立てると、一そう女に好かれないものさ。

赤座はこういうごちゃごちゃした一家のなかでむんずりと暮らしていたあの時分の弱った気持を考えると、眼のまえにかしこまっている涕を垂らしそうな青書生が、娘の対手とは思えない気もしていた。りきが手荒なことをしてくれるなと言ったが、だんだんそんな気がしないでこいつも可哀そうなどこかの小せがれだと思わずにいられなかった。その反対に帰りに土手の上におびき出して思うさまこん畜生を張り倒し、娘の一生をめちゃくちゃにしたつぐないをしてやろうかとも考えて見たが、青書生を対手にしていい歳をしてそんな手荒なことが出来るものではなかった。赤ん坊は死んでいるし娘も満更でなかった小畑のことだから、そっと帰してしまった方がいいように思われた。

――もんはあんたに逢いたくもなかろうから此儘引き取って貰いましょう。

赤座はこういうと仕事中だからと、もう立ち上って土間に降りて行った。そしてもう一度小畑の方を見ると、赤座は半分しょぼしょぼな顔つきになって、考えていることの半分もいえないような声で言った。

――小畑さん、もうこんなつみつくりは止めたほうがいいぜ、こんどはあんたの勝ちだったがね。

赤座は自分で言った言葉にすっかり参った気持になり、いそいで土手の上にあがって行った。晴れつづきの磧は、真白に光っているところと、雑草にへり取られた磧の隔れ隔れになったところと、さらにべっとりと湿った洲の美しい飴いろの肌をひろげたところと、それらの広茫とした景色は光った部分から先に眼にはいって行き、迅い流れをつづる七杯の仕事船が蝶の羽のように白く見えた。もんも伊之も、そしてさんもみんな舟仕事のあがりで育てられた。もんや、さんの生れがけの時分はりきは若くて先の優しいとがりを持った乳ぶさを持っていて、弁当のときにはその空をもってかえるまで乳ぶさをふくませ、摘んで食える茎を抜いていたりしていたのも、そんなに遠いこととは思えなかった。だのに娘はこどもを生み落すようになりその男と対き合っても正直に怒鳴る気さえ起らなかった

のは、よほど赤座の心がこういう問題に弱りを見せているとしか思えなかった。りきにしても赤座の応待があんまり鷹揚すぎるのと、却って赤座自身が早くこの問題から考えをもぎ取りたいとあせっていることさえ、察せられたのであった。あの人もよほど善くなり物わかりがよくなったと、りきはちょっと有難い気持にさえなったのだ。手の早い赤座は話の半分から殴ることしか考えなかった。殴ることがしゃべる十倍の利目があるということを、自然に一つの法則のようにしている赤座はりきにものを言うのに、少しの廻りくどさがあるとすぐに殴ることしかしらなかった。りきは殴られ通しだったがそれの数がすくなくなり、殴られると怖いぞという感覚がりきの頭にかげをひそめてから、だいぶ年月が経っていた。小畑にそうしなかったのがりきには嬉しく、小畑は憎み足りなかったけれど何の考えもなくやったことを、りきは、もんも悪いし小畑もわるいと考えていた。その考えの底を掻ッさらってみるとどうにかした縁のまわりあわせで、もんと小畑とが一緒になれないものかとそんなことも考えてみたが、もんはもうじだらくな、誰もとりつきようのない女になっていたから小畑にそのことを説くにも、小畑があんまり温和しすぎるので控えられた。りきは小畑を愛したもんの気持がだんだんわかって来るような気がし、小畑がかえって行くのが惜しいような気がした。

——こんど宿さがりをして来ましたら、あなたがおたずね下すったことをもんにそう言いつけます。

りきは母親らしくそんな柔しい言葉さえつい出してしまった。

——そして所を聞いておいて下さい。

小畑は金の包みを取り出し無理にりきの手におさめさせた。りきは小畑を送って出て、この人には一生会えないだろうと考えた。小畑も母親らしいりきに親しむことが快く感じられたので、ぐずついて直ぐに前庭から通りへ出ようとしなかった。りきが培うた夏菊とか芭蕉とかあやめとかを見ていて、夏咲く菊はどんな色ですかと尋ねたりしていて、変な懐かしさから別れられなそうに見えた。

りきは思わず尋ねてみるのであった。

——あなたはおいくつになるんですか。

——僕ですか、僕は二十四になったところです。

色が白くて神経質な小畑は年よりも若く見えた。もんと出来たのは二十三の春になる、もんと一つちがいにしかならないと、りきは考えた。りきが赤座のところに来たのは二十二の時で、あの時分まるきり女としての赤ン坊としか思えないほど、何も彼もわからなかった。小畑が一年経っても尋ねて来たのは誠意があるからであって、その誠意に気のつかなかった先刻からの自分が迂濶に思われ出した。まったくの悪い人間ならいまになってたずねて来るなどという頓馬な真似はしないであろう。

小畑は万年筆で名刺に所番地をこまかく書き入れ、それが自分の住所だからと言った。

——おもんさんに渡しておいて下さい。

小畑はそういうと田圃道を土手の方へ、何度もあいさつをしながら若いせいの高いからだを搬んで行った。りきは茫やり見送っていた。悪い時には悪いもので二三日顔を見せなかった伊之がふらふら帰って来て、眼を細めて小畑を見ていたがもんの男であることを知ると、ひどく疲れて青くなっている顔にかんしゃくをむらむらとあらわした。そして小畑が家を出て田圃道から土手へあがると、りきに見られないように小畑のあとに跟いて行った。小畑も直覚的にもんの兄だなと感じ、その感じが急激に恐怖の情に変ってしまった。伊之はだまって一町ばかりついてゆき、軈て追いついてもきゅうに声をかけずに執念ぶかく、小畑と肩をすれすれに歩いて行った。赤座に肖た伊之の顔は明るい動物的なかんしゃくで揉みくちゃになり、小畑は何時伊之が飛びかかってくるか分らない汗あぶらをにちゃ

つかす、底恐ろしさに足がすくんでしまった。早く声をかけてくれればよいと、考えても、意地悪な重なる嫌悪に気を奪られた伊之は自分でもすぐに声の懸けられないほど切羽詰って、耳のあたりがぶんぶん鳴ってくるほどの腹立しさであった。

——きみ、ちょっと。

伊之の声はこれだけであったが、呼ばれたので小畑は助かったと思い、出来るだけ従順にこたえた。

——は、

——おれはもんの兄です。

伊之はこういうと小畑はまッ青な顔つきになった。きみに話をしたいことがあるのだ。そこに坐れ話があるからとほとんど命令するように言った。小畑は仕方なく土手の上に腰をおろした。

伊之はその後もんに逢ったかと小畑に言い、小畑は逢わないとこたえた。いったい、君はもんをおもちゃにして置いておれだち一家をさんざんな目に遭わせたが、それでよく家に来られたものだ、もんはおれが子供の時に抱いて一緒に寝てやり、夜中には小便に起して毎晩土間が暗いから尾いて行ってやったもんだ。もんはまるきり赤ン坊だった時分から何時も負んぶしていて、しまいに、もんの子守をしないと遊びに出られなかったものだ。おれはもんの十七くらいの時まで、もんの顔を見ない日はなくもんと飯をくわない日がなかった。もんのからだのどこに痣が一つあってそれをもんが大きくなるまで知らなかったことを教えたのもおれだ。おれともんとはまるで兄弟よりかもっと仲がよかった。てめえの子供を腹の中に持って帰った時はおれはもんをいじめ、もんに悪態のあるだけを尽し、しまいに犬畜生のように汚ながってやったものだ。母はあんまり酷い口を利くおれをそれが本統のおれのように憎み出し、おれを毛虫のように嫌い出しもんの方につくようになったのだ、そうしないと皆がもんを邪魔者にするからだ。おれはきっとてめえが尋ねて来るときがあることを見ぬいていて、そしたらてめいにもんとおれとがそんなに仲のよい兄弟だったことと、おれが赤ン坊から育てたようなものだということを知らせて遣りたかったのだ。てめえはただの書生っぽで、男に生れついているから遣るだけのことを遣ってしまったら、人夫風情の娘なんぞに既う用はないだろう。有り勝のことだから打っちゃってしまえば訳はないだろう、だが、そうは旨く、うちの親父のようにきれいに手前を手前にもどすことは出来ないのだ。伊之はこういうちにも小畑の手首をいつの間にか摑んで、それをちから一杯に摑み返し逆にもみ上げたりしながら、目になみだをうかべて道楽者というものはこんな変な思い上りをするものかと思えるくらい、親身にぞくぞくした口惜しさに掻きむしられて、その眼のいろは対手に嚙みつかんばかりの口つきと一しょに尖って行き、小畑は摑まれた分からさきの手をしびれさせ、恐怖以上の境に追い詰められたまま、これから先どうなるのか、どういう手荒なことをされても拒めない自分から、どういうふうに遁げ出したらいいかさえ考えつけないほど、伊之の言うままになりまるで馬鹿のようになっていた。

——きみはただあやまりに来ただけか。

——あやまるよりほかに言うことがないんです。

——もんをあのままに打っちゃって置くつもりか。

——逢ったら何とか二人で相談するつもりでいるのです。

——一しょになる気か。

——そうなるかも知れません。

——嘘つきやがれ。

伊之はカッとして小畑の頬を平手で撲ちそのはずみに土手の上に蹴飛ばした。そんな乱暴なことをしないで口でいえば解るではないかという小畑を、伊之はちからに委せて一層烈しく頬打をくわした。てめえのような奴は

此処でどんな酷い目に遭ったって一生碌なことをしないことはわかっているが、これくらいのことは、もんのことを考えたら我慢していろ。もんはもう一人前の女にはならずに箸にも棒にもかからない女になって了ったのだ。けれどもてめえのような野郎と一緒になろうとは考えないだろう、そんな話を持ち込んだってもんは突ッ放してしまうだろう、もんはからだは自堕落になっているが気持は以前よりか確乎しているのだ。てめえが口説き落した生娘らしいものはもんの何処をさがしても捜しきれないだろうし、もんはそんな処女らしいものはすっかり無くしているのだ、それは手前がみんなそうさせたのだ、手前さえ手出しをしないでいたら、あいつはあんな女にならなかったのだ。

——もう再度と来るな、そしてあいつを泣かせたりもう一遍だましたりおもちゃにしないことを約束しろ。

——全く僕が悪いのです。何と言われても仕方がないのです。

伊之は起ちあがると、対手があまり従順なので張合いが抜け、いくらかの気恥かしい気持で自分のしたことが頭に応えて来てならなかった。

——それではきみはもう帰れ。おれはもんの兄なんだ、きみも妹をもっていたならおれのしたことくらいはわかる筈だ。

——では。

小畑はいま伊之の言ったことばがよく解るような気がし、先刻とくらべると伊之の顔が穏やかになっているのを、ひどい目に遭ったこととまるで反対な好感をもって見ることが出来た。

伊之は何やら言いたいふうをしたが、小畑はそれが伊之自身のしたことで宥しを乞うものに考えられてならなかった。伊之はとうとう言った。

——町に出ると乗合がある。四辻で待てばいいのだ。

一週間の後もんはふらりと帰って来たが、折よく末の妹のさんも宿下りをして二人は赤座の小屋に弁当を持って行ったが、赤座は二人の姿を見たきり何ともいわなかった。珍らしい姉妹が同時にかえって来ても一言もくちを利かなかった。姉妹が土手の上をかえって行くのを二人が気のつかないうちに、赤座は少時見つめていた。

りきがこの間小畑がたずねて来たことを話したが、もんはその話をゆっくり聞いて別に驚くふうも見せなかったが、父さんはどう言って応待していたかとそれが気になるらしく、それだけを急き込んで聞いた。父さんは何にもいわず寧ろいたわるような調子だったというと、そう、わるかったわね、あの人はもう来なくともよかったのにと言った。そしてこんど伊之兄さんと会わなかったのとたずねたが、りきは会わなかったらしいと答えた。それや何よりだわ、あの人に会うとめんどうなことになったかも知れないもの、と、もんは安心してよこになり、そら眼をして、ちょっといい男じゃないの母さんと言った。バカ何をいまになっていうのだ、子供まで背負いこませた男のことをまだほめているなんて、いい加減にするがいいとりきは苦々しく言ったが、もんはあの男からあとに男ができてもあんなにあるたけのものを好きになれる男なんてなかった。小畑には宥せるものでも他の男には宥せないものがあり、小畑よりずっといい男であってもそのいい男すぎるのが気障だったりして、ちょうどいい頃加減の小畑とくらべるとの足りないと言い、けれども小畑が来たって一しょになってやらないさ、好きなのは考えている時だけで会ったらあたしにはもう生ぬるい男になっているからと笑って言った。

さんは姉さんというひとはどうして左う男の人のことばかりをいうの。わたしにはそんなふうにずけずけ言えもしないし、考えていることの半分もしゃべれないわ。第一、男の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com